

第4章 学生の受入

本章では、農学部ならびに農学研究科のアドミッション・ポリシーに沿った学生（一般、留学生、社会人）の受け入れ状況（選抜入試、定員、入学者数など）についてまとめる。

4-1. 入学者受入方針

学部では、全体及び学科ごとのアドミッション・ポリシーを定めている（1章 参照）。これらのポリシーは「京都大学学生募集要項」、「入学者選抜要項」、「京都大学 大学案内—知と自由への誘い」、「京都大学農学部ガイドブック」及び京都大学ホームページと農学研究科／農学部ホームページに掲載して、受験生に広く公表し、周知を図っている。このうち大学案内とガイドブックは、8月に開催されるオープンキャンパス〈表 4-1〉で配付し、受験生に直接ポリシーが伝わるように努めている。

研究科でも、全体のアドミッション・ポリシー及び専攻ごとの概要が定められ、募集要項及び京都大学ホームページと農学研究科／農学部ホームページで公表されている。また、これらの情報は「京都大学農学研究科ガイドブック」に掲載され、大学院入学試験説明会等における配付によって周知されている。

[分析評]

学部、研究科ともにアドミッション・ポリシーが明確に定められ、公表周知されている。

[資料]

○京都大学学生募集要項 ○京都大学入学者選抜要項 ○京都大学大学案内「知と自由への誘い」 ○ガイドブック（学部・大学院） ○農学研究科／農学部ホームページ

4-2. 入学者の選抜

学部の入学者選抜は、全学体制で実施される一般試験と、農学部が独自に実施する私費外国人留学生特別選抜により行われている。一般入試は大学入試センター試験と個別試験（第2次）学力検査からなり、アドミッション・ポリシーに沿った幅広い視野をもつ学生を選抜するために、センター試験では国語、地歴あるいは公民、数学（2科目）、外国語の計5教科7科目、個別学力検査では国語、数学、外国語、理科（2科目）の計4教科5科目を課している。選抜に用いる入試教材・科目等は主として学部教務委員会で検討され、試験問題の適切性は全学的な視点から京都大学入学者選抜方法研究委員会で検討が行われている。学部教務委員会では、試験科目や配点の的確性を適宜検証し妥当と結論している。

現在の一般試験は、農学部を志望する全受験生が同じ科目試験を解答するが、受験の際に志望学科を3学科まで指定可能とし、学科別合格者が決定される。また、農学部への入学を強く希望し優秀な入学試験成績を示した受験生の、希望する農学各分野（学科）

への入学を手厚く保証する制度の検討を進め、平成 28 年度入学試験より 6 学科(全学科)まで志望することを可能とし、広く公表した。

これに加えて、受験生に複数受験機会を保証するとともに、一般試験では見いだせない特長ある入学者を加えるため、全学の方針に同調して農学部においても平成 28 年度入学試験より資源環境経済学科において、また平成 29 年度入学試験からは全学科で「特色入学試験」を実施する予定である。この試験では、高校教育と大学教育の接続連携をより緊密にする方向で実施し、少数ではあるが特長ある合格者を一般入試より前に決定することとしている。

私費外国人留学生特別選抜では、日本留学試験、TOEFL、学部で出題する理科試験(2科目)及び面接試験により、本学で学ぶための基礎的な学力とコミュニケーション能力の適正を判定している。

一般入試、特別選抜いずれの場合も、学科ごとに入学者を決定し、4年間の一貫教育を実施している。ただし、3年次への進学時において転学科希望者がある場合には、学業成績等を考慮して面接し若干数を許可する場合もある。また、他学部からの転学部希望者についても、同じく3年次への進学時に学業成績や入学試験の成績その他を考慮して受け入れることがある。表 4-2 には、転学部・転学科の状況をまとめた。

研究科では、一般選抜、私費外国人留学生特別選抜及び社会人特別選抜によって専攻ごとに修士課程入学者(8月中旬と1月下旬)、及び博士後期課程編入学者(1月下旬)を選抜している。選抜はいずれも研究科で独自に実施している。

一般選抜では、英語、専門科目(修士課程は2科目、博士後期課程編入は1科目)及び面接により選抜を行っている。英語の試験では、生物、化学、物理、社会科学の4分野にわたり農学研究にとって必要な英語読解力と翻訳力を見るための研究科共通の問題が出題される。専門科目と面接試験は、専攻ごとに専門分野に関する基礎学力とコミュニケーション能力、学術意欲、科学者倫理性を判定している。

特別選抜の方法も基本的には一般選抜と同様であるが、英語に関しては専門領域に関する語学力をより詳細に判定するために専攻独自の出題を課す場合もある。また、博士後期課程社会人選抜では、筆記の専門科目に代えて口頭試問により専門学力が判定される。

研究科では平成 22 年度から、英語のみ(ガイダンス、ガイドブック、講義、教育研究指導)で修了できる特別コースを開設したが、このための入学者は、学業成績、TOEFL等の英語力検定試験成績、推薦状、研究計画書などの書類を総合的に調査して、コースへの適正を判断している。さらに、研究科入学者で希望する学生は京都大学のリーディング大学院(グローバル生存学大学院連携プログラム、「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラム)や森里海連環学教育プログラムへも重複して履修登録が可能である(表 4-3)。

以上の入学者選抜方法に関する適切性は、専攻ごとに検討されたあと、研究科教務委員会で協議され、適宜見直しがなされている。例えば、地域環境科学専攻では専攻の専

門性の違いをより考慮して、従来可能としていた専攻をまたがる専門種目（分野に相当する）の志望を制限するとともに、志望する専門性への熟考を志望者に促す目的で志望可能な専門種目を3から2種目に制限した。また、英語共通問題（特に修士課程入試）に関しては、他研究科・他学からの受験生への障壁となっている現状を踏まえて、その適正性と可能な対応の検討が進められている。

[分析評]

入学者選抜は適切に実施されており、選抜方法に関する検証と対応を進めながら、よりアドミッション・ポリシーの趣旨に沿うべく継続的に改善が試みられている。

[資料]

○京都大学学生募集要項 ○農学部私費外国人留学生特別選抜出願要項 ○農学研究科修士課程学生募集要項（一般選抜、私費留学生特別選抜、社会人特別選抜） ○農学研究科博士後期課程編入学学生募集要項（一般選抜、私費留学生特別選抜、社会人特別選抜）

4-3. 入学者数の変遷状況

学部入学志願者数は、前期日程のみでの入試実施である過去6年間（平成19年から25年）で募集人員の2.7倍から2.9倍の間で、最近3年間も2.8倍前後で推移している〈表4-4〉。入学者は定員300名に対して過去3年は316名から315名と合格者全員が入学し、充足率は1.05倍とやや定員を上回る程度である。各学科の充足率はいずれも学部全体の充足率と差はなく、学科間に大きな差はない。例年、3年次進学時に転学部・転学科が許可されるが、その数を加えても各学科定員の110%を超えることはなかった。なお、入学生の質的保証（英語能力）を検証する一環として、国際高等教育院（全学共通科目を実施）が平成26年度から実施する全新入生対象のTOEFL-ITP試験に本学部も参加している。

また、国際化をめざし、定員枠外で私費外国人留学生を過去3年で6名受け入れている〈表4-5〉。加えて、この期間に5名の日韓理工系留学生も受け入れた。

大学院修士課程では、応募状況は専攻によってばらつきがあるが、全体としては過去3年間（平成23から25年度）入学定員263名に対して、421（1.60倍）から439名（1.67倍）の志願者があり、入学者数も271から290名と定員の1.03から1.10倍を推移した〈表4-6〉。この他、特別選抜により外国人留学生（私費と国費）を過去3年間で64名受け入れており、過去3年間の入学者合計の定員充足率はそれぞれ1.13、1.11、1.18倍である。

なお、充足率をそれぞれの専攻で見るとばらつきがあり、入学者が定員を大きく上回る専攻がある一方で、定員に満たない専攻もある。

入学者のうち、他研究科・他大学出身者の占める割合は過去3年間いずれの年においても約1/3である〈表4-7〉。また、この間に社会人特別選抜による入学者が3名あり、

本制度の整備が活かされた。

修士課程から博士後期課程への過去3年間の進学者数は49、50、37名でやや減少する傾向が見られる。博士後期課程からの編入者（社会人特別選抜による入学者を含む）を加えると57、65、61名となり、これに特別選抜により入学する留学生（過去3年間で計35名）を加えても定員120名に対する充足率は、それぞれ0.59、0.60、0.63倍と低迷した<表4-8>。なお、社会人特別選抜による入学者は3年間で24名と高い実績を残している。

以上のような大学院の定員充足状況を鑑み、平成20年度から研究科教務委員会において修士課程と博士後期課程の定員数に関して検討され、研究科会議（教育事項を審議する教授会）において、修士課程定員の増員（40名）と博士課程定員の減員（30名）を実施する決定をした。この定員変更案（平成27年度入学試験から）は大学レベルの同意も得られ、概算要求事項として現在文部科学省に申請している。

全専攻が参加する大学院入試説明会は東京と京都で開催してきた。また、これに加えて専攻や専攻内の系単位での説明会を京都で実施している。これらの説明会の検証が研究科教務委員会や教授会で現在進められ、より充実した開催形態を検討している。

なお、留学生の受け入れについては、本学が「国際化拠点整備事業（グローバル30）」の拠点大学として採択されたことにより平成22年度から設置された、「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム（K. U. PROFILE）」の一環として、英語のみで修士及び博士後期課程を修了できる特別コースを開設したもので、この事業への国の直接的な支援期間終了後（平成26年度以降）も独自に継続させている。本コースでは、専任の外国人教員を採用すると共に、従来国費留学生のみに限られていた10月入学の制度が私費留学生にも適用され、海外からの入学志願者の要望に対してより柔軟に対応できている。ここ3年間の本コースの入学者数（本コース合格者に加えて、国費留学生もコースへの入学が可能：入学者数はその合計）は下記の通りである。

平成23年度 春入学：11名

ミャンマー、ベトナム、コロンビア、中国、パキスタン、バングラデシュ、マレーシア

平成23年度 秋入学：9名

ミャンマー、インドネシア、アメリカ、ベトナム、マレーシア、中国

平成24年度 春入学：8名

アフガニスタン、インドネシア、ミャンマー、韓国、中国、ジンバブエ

平成24年度 秋入学：5名

ベトナム、韓国、中国、バングラデシュ

平成25年度 春入学：9名

マダガスカル、韓国、ベトナム、中国、ミャンマー、マレーシア、インドネシア

平成25年度 秋入学：15名

中国、スリランカ、インドネシア、ミャンマー、タイ、アメリカ、イラン、ジンバブエ

さらに、平成26年度からは国費留学生優先枠（年度ごとに、修士課程5名と博士課程

5名)を獲得し、従前の国費留学生支援制度(大使館推薦、学内推薦)への上乗せが可能となった(11-1 参照)。

[分析評]

学部の入学者については、わずかに定員を上回りながらも数年来安定して推移しており、適切な状況にあると言える。

大学院修士課程については、志願者の多さが考慮された結果、入学者が定員をやや上回っているものの、全体としては健全な状況で推移している。しかし、専攻によっては入学者が定員を満たないところがあり、改善が必要である。今後さらに積極的な本研究科や専攻のPR活動を進める必要があるが、これを踏まえて大学院入試説明会を複数開催することや、説明会の充実(時間的な増加など)を検討し順次実施に移している。

博士後期課程における定員充足率の低迷は、種々のPR活動の実施にもかかわらず改善されず、依然として大きな問題として残っている。今後も入試説明会の一層の充実を図る必要があるが、前述した概算要求中の入学定員変更(平成27年度から修士40名増員、博士後期課程30名減員)の実施とともに根本的な対応を図りたい。

国際化をめざした留学生の教育体制は、大学院特別コースの継続的な充実によって更なる発展を期したい。

[資料]

○農学特別コース募集要項 ○大学院入試説明会資料

4-4. 前回の外部評価における主なご指摘とその対応

○入学者の変遷状況については、平成19年度より出願者が急減しているが、この原因については検討しているのか。また、最近の学部入学試験の競争倍率が以前に比べると低くなっているが、入学者の資質などに変化は見られないのか。

従来の前期日程・後期日程による入試実施体制を、平成19年度より前期日程のみの実施に変更したための出願者総数の減少であり、入学生の資質の低下は認められていない。

○なぜ資源生物科学科だけが94名の定員になっているのか。他の学科とのアンバランスが目立つ。

平成13年の学科改組に当たり、本学科は農学が有する複合的課題への対応を基軸にした学際領域横断型学科の一つとして設立された経緯があり定員が大きい。ただ本学科の定員の適切性は、将来的な検証事項の一つである。

○英語のみで修士及び博士後期課程を修了できる特別コースの設置も多様性という観点から興味を持たれるが、日本人学生も本コースを終了できるように取り計らっていただきたい。

現段階では、実施上の課題(例えば、日本人学生の10月入学への諸準備など)もあり、検討・検証は進んでいない。平成25年度から、グローバル30プログラムが特別コース

プログラムへ変更されたこともあり、近い将来に検証を進めたい。

○博士修了者の企業就職については、企業側（経団連なども）と大学側が促進のために協力する必要があると思う。博士後期課程への進学者の減少は、学官におけるアカデミックポストの減少に伴う止むを得ない面もある。しかしながら、博士後期課程修了者を民間企業では活用しづらいというミスマッチングを改善する努力・取り組みが必要と思われる。

京都大学では、学生総合支援センター内のキャリアサポートルームが博士後期課程修了生の就職支援を重点事項の一つとして扱っている。農学研究科の教員は本ルームとも連携して尽力をしているが、眼に見える改善がなされ、博士進学者数の増加をみるまでには至っていない。

○留学生の比率が少ないことは憂慮すべきであり、たとえばアジア地域を戦略目標とする研究の展開と留学生の受け入れを連動させるようなダイナミックな政策があってもよい。

11-1にも述べたように、学部と大学院の留学生数は微増している〈表 4-5, 4-6, 4-7〉。これは、「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム (K. U. PROFILE)」の一環である英語のみで修士及び博士後期課程を修了できる特別コースを、現在も独自に継続させている（本コースでは、従来国費留学生のみに限られていた10月入学の制度が私費留学生にも適用され、海外からの入学志願者の要望に対してより柔軟に対応できている）ことや、海外各地で継続的に多数実施されている本大学院入試説明会の効果と考えている。さらに、上述したように平成26年度からは国費留学生優先枠を獲得するなど、留学生増加の加速が見込まれる。

○入学者数が定員に満たない専攻があることがご指摘されている。この場合等、学生のニーズと研究の面白さを発信するための仕掛けは、意外と有効な方策であるので工夫をすべきだろう。

受験生の増加に向けて、大学院入試説明会を複数開催かつ複数の地区で実施している。毎年の検証を重ねて、その充実（時間的な増加など）を順次実施し、研究の面白さの発信に努めている。また、受験生にとって情報入手手段として一層重要となってきた各専攻や研究室のホームページの充実を広く進めている。

〈表 4-1〉 京都大学オープンキャンパス農学部企画参加者数

	申込者数	参加者数
前期平均 ¹⁾	754.7	653
今期平均 ²⁾	760.3	708.7
H23年度	761	698
H24年度	760	717
H25年度	760	711

¹⁾H20年度～H22年度平均

²⁾H23年度～H25年度平均

〈表 4-2〉 転学部・転学科の状況

	転学部（転出）		転学部（転入）		転学科	
	出願数	転出者数	出願数	転入者数	出願数	転学者数
前期平均 ¹⁾	1.7	0.7	2.7	0.3	5.7	3.7
今期平均 ²⁾	1.7	1.0	2.7	0.0	3.0	1.7
H23年度	0	0	2	0	2	1
H24年度	1	1	0	0	3	1
H25年度	4	2	6	0	4	3

¹⁾H20年度～H22年度平均

²⁾H23年度～H25年度平均

〈表 4-3〉 リーディング大学院等への重複履修者数

	平成 25 年度	平成 26 年度（参考）
リーディング大学院		
グローバル生存学	4	5
日アセア双方向人材育成 ¹⁾	（受入）3（派遣）2	（受入）2（派遣）0
思修館 ²⁾	3	3
森里海連環学	29	43

¹⁾ダブルディグリープログラム（修士課程のみ）

²⁾一期生のみが研究科を重複して履修が可能（開設時の経過措置）

〈表 4-4〉 農学部出願者数・合格者数等

	入学定員	出願者	合格者	辞退者	入学者		
					合計	男	女
前期平均 ¹⁾	300	832.7	316.3	1.0	315.3	212.0	103.3
今期平均 ²⁾	300	842.3	315.7	0	315.7	215.3	100.3
H23 年度	300	851	316	0	316	209	107
H24 年度	300	821	316	0	316	216	100
H25 年度	300	855	315	0	315	221	94

¹⁾H20 年度～H22 年度平均

²⁾H23 年度～H25 年度平均

〈表 4-5〉 農学部私費外国人留学生特別選抜志願者数・合格者数等

	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
	総数	女性 ³⁾	総数	女性 ³⁾	総数	女性 ³⁾	総数	女性 ³⁾
前期平均 ¹⁾	10.0	5.3	9.0	5.0	1.7	1.0	1.0	0.3
今期平均 ²⁾	16.3	9.7	15.0	9.0	2.3	1.7	2.0	1.3
H23 年度	22	11	19	10	2	2	2	2
H24 年度	13	10	13	10	2	1	1	0
H25 年度	14	8	13	7	3	2	3	2

¹⁾H20 年度～H22 年度平均

²⁾H23 年度～H25 年度平均

³⁾女性は内数

〈表 4-6〉 農学研究科修士課程入学状況

	一般選抜				特別選抜入学者			入学者		
	入学定員	出願者	合格者	辞退者	入学者	私費留学生	国費留学生	計	男	女
前期平均 ¹⁾	263	424.3	305.3	15.0	290.3	13.0	2.3	305.7	208.3	97.3
今期平均 ²⁾	263	429.3	299.0	20.3	278.7	14.3	7.0	300.0	191.3	108.7
H23 年度	263	439	300	29	271	11	14	296	182	114
H24 年度	263	428	295	20	275	14	4	293	187	106
H25 年度	263	421	302	12	290	18	3	311	205	106

¹⁾H20 年度～H22 年度平均

²⁾H23 年度～H25 年度平均

〈表 4-7〉 農学研究科修士課程入学者出身別構成

	本学農学部	本学他学部	国内他大学	国外他大学	計
前期平均 ¹⁾	203.7	5.0	81.7	15.3	305.7
今期平均 ²⁾	216.7	3.0	62.0	18.3	300.0
H23年度	201	3	68	24	296
H24年度	225	4	52	12	293
H25年度	224	2	66	19	311

¹⁾H20年度～H22年度平均

²⁾H23年度～H25年度平均

〈表 4-8〉 農学研究科博士後期課程への進学・編入学状況

	入学定員	本学進学者			編入学者			合計	進・入学者	
		日本人学生	留学生	出願者	入学者	出願者(留)	入学者(留)		男性	女性
前期平均 ¹⁾	120	45.3	6.7	18.0	15.3	16.0	15.7	83.0	63.7	19.3
今期平均 ²⁾	120	37.0	8.3	19.3	15.7	12.3	11.7	72.7	47.3	25.3
H23 年度	120	45	4	9	8	14	14	71	47	24
H24 年度	120	38	12	19	15	8	7	72	47	25
H25 年度	120	28	9	30	24	15	14	75	48	27

¹⁾H20 年度～H22 年度平均

²⁾H23 年度～H25 年度平均